

津久見中央病院での研修を終えて

総合診療科専攻医 2 年目 上田 聖

国立国際医療研究センターとの連携プログラムを利用して、2024 年 9 月から 2025 年 3 月までの半年間を津久見中央病院で研修させていただきました。総合診療という道を決めた時から、地域での医療に携わり現状に目を向ける必要があるとは常々思っていました。本病院は地域の中核的な医療機関として機能しており、二次救急病院として多様な症例に対応する役割を担っており、振り返ってみればまさしく自身の見識を広げるのに適した環境だったなと痛感します。県外からふらっと来たにも関わらず、病院の皆様には温かく迎えていただき、また、多くのことを学ばせていただいたことに心より感謝申し上げます。

津久見市は地域の特性上、高齢者の割合が高く、入院患者も 80 代が平均で 70 代だと若いという印象を受けました。また、単一疾患の問題で入院する方は少なく、multimorbidity に沿ったアプローチが必要になることが多く、総合診療医として強みを発揮する機会に恵まれました。また、最初から最期まで地元で過ごすことを希望し病院で最期を迎えた患者さんや、高次医療機関で急性期治療を終えた患者さんの disposition の決定など、地域の医療資源をできる範囲で活用し、様々な経験を積むことができました。また、当院は 2 次救急病院を標榜していますが、津久見市で唯一の入院病床を持つ急性期病院であるため、3 次救急症例への対応を要することもありました。スタッフのマンパワーや設備の面からも高次医療機関と完全に同一の治療を提供できるわけではありませんでしたが、それでも限られた資源を駆使し可能な範囲で最大限の治療を行う大切さを学ぶことができました。これら以外にも、研修期間中に外科の石川院長、江口副院長のご指導の下で上下部内視鏡検査の技術を勉強させていただきました。ご多忙にも関わらず、消化器科志望でない自分にも手技を教えてくださいましたことは本当に感謝しております。津久見中央病院には非常に勉強熱心な特定看護師さんがいらっしゃり、PICC 挿入のレクチャーや POCUS という超音波検査の勉強会を開催していたことも良い思い出です。

このように総合診療の基本理念を実践し、多様な患者さんと向き合うことで診療技術だけでなく、コミュニケーション能力や多職種との協働の重要性を再認識しました。また、都市部の病院とは異なり、地域医療に従事することの意義や課題についても深く考える機会となりました。限られた医療資源の中でいかに最善の医療を提供するかという課題に向き合いながら、地域医療の現場で求められる医師像を模索することができました。

本研修で得た経験を生かし、今後も総合診療医としてのスキルを高めていきたいと考えています。今回の研修で得た臨床経験や地域医療に関する知見を、今後の診療に役立てていきたいと思っています。

最後に、研修にご指導・ご協力いただいた津久見中央病院の皆様に深く感謝申し上げます。